

否定辞付き話題化構文 —文断片からの動的分析に向けて—

On *Not*-Topicalization: Toward a Fragment-Based Dynamic Analysis

天沼 実
AMANUMA Minoru

1. はじめに

下例 (1) は、レクリエーションエリアにのり込もうとする話者Bとそれを制止・牽制する話者Aとの会話である。制止しようとする話者Aの発話 (1A₂) では前置された副詞類句に否定辞 *not* が付加されている。Culicover (1999) はこの種の前置構文 (あるいはその形成に関わる統語操作) を *Not* 話題化 (構文) (*Not*-topicalization)、また、前置された句を *Not* 話題句 (*Not*-topic) と呼ぶ。

(1) A₁: Where do you think you're going?

B₁: I do not think, sir. I know where I am going. I'm going to the recreation area.

A₂: *Not like that you're not.*

B₂: What was that you said?

A₃: I said *you're not going to the recreation area like that.*

(*A Shot in the Dark*; 斜字体化および音調の表示は筆者による)

(1A₂) では節本体が否定文であり、都合二つの否定辞が表出していることになるが、それらが互いに否定の意味を打ち消しあう二重否定 (e.g., *I did not say nothing.*) とはならず、(1A₃) の言い直し (斜字体部) にみられるように一重否定の意味となる。文否定にともないいくつかの否定表現が共起して一重否定文を作り出すという点においては、非標準英語に見られる否定一致 (e.g., *There ain't no nothing.*) と似た現象と言えるかもしれないが、*Not* 話題化構文は、実例観察はほぼ口語に限られるものの、決して非標準英語に特有というわけではない。(1A₂) のような鋭い言い返し (retort) をする場面で標準英語話者が用いる構文として観察されるものである。(Huddleston and Pullum 2002: 846)

この構文については、変則的な否定文の例として Quirk et al. (1985) や Huddleston and Pullum (2002) などの伝統文法の記述があり、更に Lawler (1973) や Culicover (1999) が特異な統語特性を持つ否定文あるいは前置構文として着目している。本稿ではこれら先行研究を踏まえて当構文の事実観察を整理・拡充しつつ、動的文法理論 (Kajita (1977, 1983, 1997)、梶田 (2004) 等) の枠組みによる当構文の分析案を探り、その統語的、意味的特異性の源を関連する文断片の構造と談話機能的特性に求める原理的な説明の可能性を示す。

2. *Not* 話題化構文の特異性と問題

2.1 下降+上昇 (*Not to mè, you háven't.* (Quirk et al. 1985: 1418)) の音調型を特徴的に持つこの構文は、例 (1) にも見られるとおり *Not* 「話題句」が新情報になる (Huddleston and Pullum 2002: 846)、いわゆる焦点の話題化の一種であると言ってよい。一見したところでは、目的語などの話題化や副詞句前置などの一般的な移動操作によるところとする分析がまず考えられるかもしれない。しかしながら観察を

進めてゆくと、この構文には話題句の前置に付随するさまざまな特異性が見られ、既存の前置現象とは一線を画す存在であることがわかる。

(1A₂)と(1A₃)の例で見たとおり *Not* 話題化構文の解釈は一重否定となる。文頭の *Not* はいわば虚辞的であるが、このような否定辞が(2)のように当該話題句の基底の位置で付加されることはない。

(2) *You're not going to the recreation area not like that.

また、*Not* 話題化構文では(3a)のとおり、節本体が否定文でなければならない。通常の話題句前置には(3b)のとおり、そのような制約はない。

(3) a. Not to me, you haven't/*have.

b. To me, you haven't/have.

前置される *Not* 話題句の内部構造を少し見てみよう。話題句となる範疇としては上掲の例に見られる前置詞句(PP)のほか、名詞句(NP)や(述部)形容詞句(AP)、さらには従属節(S')など、広範なものが可能である。

(4) a. Not that one you won't. (NP) (Culicover 1999: 183)

b. Not that tall he isn't. (AP) (ibid.: 183)

c. Not while I'm paying for it, it's not. (S')

副詞句(AdvP)も可能である。(5)は様態の *ly* 副詞が *Not* 話題化された例であるが、この類の副詞は一般に副詞句前置を受けにくく、とりわけ否定文の文頭には現れないとされているにもかかわらず、*Not* 話題化による前置は可能である。

(5) Not that quickly you won't. (AdvP) (ibid.: 183)

cf. *Quickly, he was/wasn't walking.

これらに対して、(述部)動詞句(VP)は *Not* 話題句としては許されない。(7)のように、いわゆる動詞句前置による動詞句の話題化は一般に可能であることとは対照的である。

(6) a. *Not eat the cake you won't.

b. *Not eating the cake he isn't.

c. *Not eaten the cake he hasn't.

(ibid.: 183)

(7) Eat the cake you will/won't.

Not 話題化構文全体の生起する環境に目を転じてみると、この構文は例えば(8)に見られるように、従属節や等位節では厳しく制約される。原則として主節に限られる、いわゆる主節現象であるが、副詞句前置などよりもその制約が更に厳しいことがうかがえる。

(8) a. I thought they did that everywhere, but she told me that (*not) in France they don't.

b. In England, they do, but (*not) in France they don't.

(Lawler 1973: 363)

2.2 以上の観察に加え、*Not* 話題化構文には更に多くの興味深い特異性がある(後述)のだが、Culicover (1999) はそれらの統語特性のまとまりを(9)のように表記される構造とほぼ直結した特異な制約の束(*sui generis*)としてそのまま認めて記述し、子供にはその獲得を可能にする「保守的かつ注意深い習得(*conservative attentive learning*)」の能力が備わっていると考える。

(9) not-XP IP[+NEG]

このような考え方は、この構文の特異な性質がなぜ一つの構文の形となってまとまりをなしているのかという根本的な問いに対して、「偶然である」ということ以上の答えを導き出すことができない。また、Culicoverの言う conservative attentive learning のメカニズムがどのようなものか明示されていないが、いずれにせよこのような特殊な条件の記述を許すような一般言語理論は、他にも同種の特異な制約がありうることを一般に認める、記述力のきわめて大きなものにならざるを得ない。それでは言語習得の事実の説明において重要な「可能な文法」の概念を十分狭く定義することができなくなってしまう。更には、このような分析案およびそれを許す理論自体の反証可能性も小さいものになってしまうことになろう。また、後述するが、この構文にはある種の文断片構造との間に興味深い依存関係が見られるのだが、そのような事実関係を捉えることも不可能である。

Lawler (1973) や Huddleston and Pullum (2002) は文頭の否定辞の生起がある種の否定一致 (negative concord) によるものと示唆しているが、標準英語に広く観察されるわけではない否定一致がなぜ否定文における話題化では発動されるのか、なぜこの構文の諸々の特異性と共起するのかなどの説明に至る見通しは示されていない。

3. 文断片からの動的分析

3.1 Kajita (1977, 1983, 1997 等) によれば、従来の統語分析が立脚する一般言語理論の枠組みでは「可能な文法」の定義は概略 (10) のような形式による述べ方のみが認められている。

- (10) a. Every adult grammar must have property P.
 b. Every adult grammar may have property P.
 c. Every adult grammar must have at least one of a set of properties, P_1, \dots, P_n .

(Kajita 1997: 380)

ここで属性 P は大人の文法の属性として可能であるかどうかのみが問題とされており、言語習得の中間段階の文法の属性や習得の順序などの影響を受ける可能性は考慮されていない。大人の文法は子供が始発状態から安定状態までに接する一次言語資料の総体の関数としてあたかも瞬時にして (一段階で) 習得されるものに等しいと想定して問題ないという考え方である (cf. Chomsky 1975, 1986, etc.)。しかしながら、Kajita は、(10) のような述べ方のみによる理論では複雑で多様な自然言語の実態を捉えつつ、言語習得の事実を説明すべく「可能な文法」を十分に狭く規定することは不可能であると考え、(11) のような述べ方により「可能な文法」を規定する枠組みが必要であることを主張する。

- (11) If $G(L,i)$ has property P, then $G(L,i+1)$ may, though need not, have property P', and if $G(L,i)$ does not have P, then $G(L,i+1)$ cannot have P' unless some other constraint in the system makes P' possible in $G(L,i+1)$.
 [$G(L,i)$: the grammar of a language L at an arbitrary stage S_i ; $G(L,i+1)$: the grammar at the next stage of that language]

(Kajita 1997: 384)

これによれば、習得の中間段階の文法の属性により次の段階の「可能な文法」の集合を規定することができることになる。その意味で(11)のような書式による制約を動的制約 (dynamic constraint) と呼び、動的制約を理論の主軸とする文法理論を動的 (非瞬時的) 文法理論と呼ぶ。動的制約は、その一般性がより高いものであればそれだけ次の段階の可能な文法の集合をよりせまく限定できることになる。そのような動的制約は一般に肯定的 (positive)、内包的 (intensional)、相互作用 (通モジュール) 的 (interactive (cross-modular)) な表現形式をとり、その発動・適用は蓋然論的 (probabilistic)、累加的

以降、このような否定的文断片を「断片的 *Not-XP*」と呼ぶことにするが、この形式と *Not* 話題句との間には興味深い共通性が見られ（後述）、断片的 *Not-XP* と *Not* 話題化構文との間に何らかの依存関係があることが推察される。以下、この文断片形式の特徴に注目し、*Not* 話題化構文との関係について考察し、動的文法理論にもとづく同構文の分析案を提示する。

断片的 *Not-XP* は否定辞の照応的用法 (*anaphoric not*) の一つである。照応的否定辞が (15Ba) のように使われる場合には節の命題全体が文否定辞 *not* のみで代用され、極性が否定であることそのものが焦点化される効果がある。

(15) A: Is he coming?

B: I think not. // It seems not. // Apparently not. // Why not?

断片的 *Not-XP* の *not* もまた先行命題を受けた文否定であり、否定の強調形の一つであるが、発話の焦点は後続の *XP* になる。(16B) は疑問に対する応答の焦点として、(17) と (18) は否定の文脈で否定の焦点となる情報を付け足すために用いられている例である。

(16) A: When are you going to be able to go out?

B: Not for a while.

(17) I'm not leaving. Not without my daughter!

(According to Jim)

(18) A: Don't worry about me. I'm a robot. I'm just a machine.

B: No, you're not. Not to me.

(Friends)

このような情報構造を持つ断片的 *Not-XP* は、(14) ((19) に再掲) に見られたとおり、対話者による直前の発話に対する否定的応答としても用いられ、拒絶や反駁などの否定的な発話行為となることがよくある。

(19) A: I think you should leave.

B: Not without my money.

この場合の *not* も先行命題を受けた文否定でありかつ主断定であるために *Not-XP* 全体が否定応答としての機能を果たしていると思われる。しかし、ここでは否定辞 *not* が表現の先頭にあり、いわゆる文末焦点の発動もあって後続の *XP* が焦点となるため、否定辞自体に焦点をあてて否定極性であることを明示することができない構造になっている。つまり、対話者の発した命題を強く否定し、拒絶や反駁などを遂行する機能・語用論的意図は、形式上はいわば不十分あるいは間接的に表現されているだけと言ってよいであろう。

以上述べたことは、次のような例を見ればあながち的外れなことではない。

(20) A: Why, your mother is not allowed to have a friend?

B: Not a male friend. No. She's my mother.

(Everybody Loves Raymond)

(21) A: Trouble?

B: Not if I leave this instant, no.

(Cheers)

このような談話の例は決して珍しいものではない。ここでは、それぞれの話者 B が A の発話に対する強い言い返しの意図をもって断片的 *Not-XP* を用いた直後にすかさず *no* によって否定であることを重ねて強調しているが、これは意図した否定の行為が断片的 *Not-XP* だけでは十分に表現されていない

がために起きているものと考えることができる。

以上のとおり、断片的 *Not-XP* の否定応答用法には達成されるべき機能・意図が形式によって十分には実現されていないというある種の「ずれ」が生じている。ここで、否定応答用法の断片的 *Not-XP* は習得しているが *Not* 話題化構文は未習得であるような、ある中間段階 S_i の文法 G_i を想定してみよう。(二構文のうち前者は後者よりも構造的により単純で、実例としてもより高い頻度で観察されるが、それを考慮すれば、少なくとも逆の状況、つまり後者は習得済みだが前者は未修得であるというような状況が生じている段階は想定しにくいであろう。) Kono (1997) は習得の中間段階におけるある表現形式とその意味の関係が (22) のような「不十分な表示 (Insufficient Representation)」の条件を満たす場合、十分に表示されていない意味要素 m_i に対応する形式要素 f_{n+1} を顕在化し表示の不十分さを解消する顕在化の規則 (Rules of spelling out) を次の段階の文法に導入するような文法拡張が動機付けられると主張している。

(22) Insufficient Representation

- (i) Meaning M is composed of semantic elements m_1, m_2, \dots, m_n .
- (ii) Form F is composed of formal elements f_1, f_2, \dots, f_n .
- (iii) F is used to represent M .
- (iv) F overtly represents m_1 - m_n except m_i ($1 \leq i \leq n$)

(Kono 1997: 425)

これに照らしてみると、断片的 *Not-XP* の否定応答用法はその形式と談話・語用論的機能の関係において同等の条件を満たしていることになると言える。つまり、 M として情報構造や談話上の機能、さらには発話行為などの語用論的機能など複合を含めることができると考えれば、否定応答用法の断片的 *Not-XP* は、担わされる機能を十分に満たすための要因の一部 (すなわち否定極性の焦点化) を形式的には十分に実現しておらず、(22) の条件に該当する状況が生じているとすることができる。

否定応答に典型的に用いられる基本的な形式の一つは応答の否定辞 *No* ならびにそれを敷衍した形になる *No, you're not.* のような、いわゆる short answer である。これらは *Not* 話題化構文の習得がおきるような段階では既に習得され定着していると考えてよさそうであるが、そのことが上述の条件による文法展開への動機を累加的に高めているのではないかと考えられる。否定応答の *No* と断片的 *not-XP* はともに否定を内包する構成素であり、否定応答に用いられる談話機能上の共通点をもつという点で、これら二者間には構造上の類似性 (flat structure similarity) と意味・機能上の類似性 (semantic/functional similarity) が認められる。ここで、前者には対応する敷衍系すなわち short answer 形 *No, you're not.* があり、否定極性を文末焦点として形式的に明示し重ねて強調することができるのに対し、後者は前者との間に上述の類似性があるため、その潜在性はあるものの、実際に short answer に相当する敷衍形式は持たない、という状況が生まれることになる。この状況を一般的な形で描写すると以下ようになる。

(23) (i) $G(L, i)$ includes a certain set of rules R that generate a construction C_1 , which is characteristically associated with a certain functional property P_F .

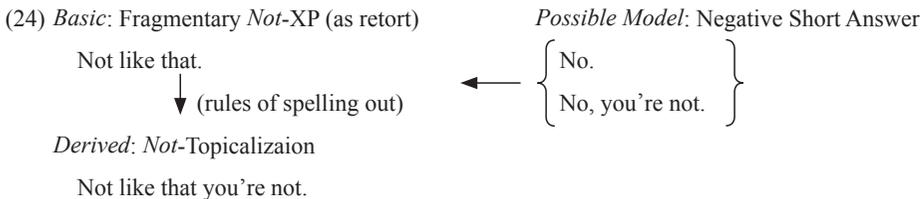
(ii) P_F is potentially associated with a construction C_2 , which is related to C_1 in a certain special way.

(iii) C_2 only insufficiently represents P_F .

このような条件が満たされた場合、次の段階の文法 $G(L, i+1)$ への移行において C_2 に適用される新たな規則 R' を既存の規則 R にもとづいて派生的に形成、導入することにより P_F の実現をはかるよう

動的なメカニズムが働く動機が高まると考えられる。目下の具体例にあてはめれば、 P_F は否定の short answer によって明示的に達成されている「(文末焦点化による) 否定極性の強調(ならびにそれによって直接的に遂行される拒絶、反駁などの発話内行為の力)」である。断片的 *Not-XP* (C_2) は否定の short answer を導く否定表現 *No* と類似する機能を持つためこの機能を果たす潜在性があるものの、short answer の形成規則 (R) が断片的 *Not-XP* に対して適用されることはなく、したがって否定極性の強調という機能的効果は形式的に不十分な、潜在的な表示にとどまっている。このような条件下で顕在化の規則の導入が動機づけられることになる。すなわち、断片的 *Not-XP* に何らかの形式を連結して上述 P_F の十分な表示をはかるため、否定の short answer 形をモデルとして Quirk et al (1985) の言う敷衍的付加部 (amplificatory tag) を形成する規則 (R') が派生的に次の段階の文法に導入されると考えられる。

以上のように、 G_i が動的な文法拡張を動機付ける (22) および (23) のような一般条件を満たすことにより、次の段階の文法 G_{i+1} への移行において否定応答用法の断片的 *Not-XP* および否定の short answer (の形成規則) にもとづき、*Not* 話題化構文 (の形成規則) が派生的に導入される。図式的に表すと以下のようなになる。



4. 帰結および検証

以上のような分析によれば、*Not* 話題化構文でなぜ文頭と節本体の二つの否定辞が可能あるいは義務的であるのか、そしてなぜ一重否定文と同等の解釈になるのかという問いに対して原理的な説明を与えることができるようになる。というのは、基体である断片的 *Not-XP* では否定極性の明示が形式的に十分表示し得ていないのを動的な原理の下で否定の short answer をモデルとした形式によっていわば補う形で派生的に可能になったのがこの構文だからである。また、当分析では(2)で示された問題、つまり *Not* 話題句の「虚辞的」否定辞が基底構造形では生起しないのはなぜかという問題も生じない。この構文にあらわれる二つの否定辞は、当分析によれば、否定応答の断片的 *Not-XP* と否定的 short answer のいわば混淆によって共起するようになったと考えられるものであり、基底構造や前置操作にその源を求めるものではないからである。

Not 話題化構文は、その基体である断片的 *not-XP* とモデルとして関与した否定的 short answer の特性を反映すると考えられる。一般に否定文の文頭には現れないとされている *quickly* のような様態副詞が否定文である当構文の話題句として文頭には現れる [(5)] が、これは (25a) のように基体である断片的 *Not-XP* としてそのような副詞が生起することによると考えることができる。また、*Not* 話題句として VP が許されないのは、逆に (25b) のように断片的 *Not-XP* で述部動詞句が普通許されないからである。

(25) a. Not that quickly. (cf. (5))

b. *Not eat the cake. (cf. (6))

Not 話題化構文は主節以外では厳しく制約されることを見た [(8)] が、これについては、断片的

Not-XP が否定応答として用いられる場合は通常主節であり、その時に *Not* 話題化構文の派生的導入の動機を高める基体としてに当該の文法拡張に関与するためであると考えられることができる。

Not と話題句は隣接していなければならない。これについても、基体に同様の制約が存在することにもとづき説明することが可能である。

(26) a. *Not, this week, before lunch you won't. (Culicover 1999: 183)

b. *Not, this week, before lunch.

(27a) のように、*Not* 話題句にともなって他の副詞句等が前置されることがある。これに対応する断片的 *Not*-XP (e.g., *Not in my car with anything like that.*) が可能であることからこのことは予測される。また、この例に見られるように、*Not* 話題句だけでなくそれにもともなって前置された要素内の否定極性表現は認可されるが、(27b) のようにその否定極性表現が節本体部にとどまる場合は認可されない。節本体でも文否定 *won't* が存在し、一般には認可される位置関係のはずであるにもかかわらず容認不可能である。

(27) a. Not in my car with anything like that you won't.

b. *Not in my car you won't with anything like that. (ibid.: 183)

基体の断片的 *Not*-XP においては、認可されるべき否定極性表現はそもそも XP 内またはそれに連なる構造内に生起し、まとまりをなしている。(27b) にみられる否定極性表現の一見奇妙な振る舞いは、基体のこのような条件が *Not* 話題化構文の特性の一部として引き継がれたと考えれば自然である。

以上は基体の断片的 *Not*-XP から受け継ぐと思われる特性についてである。一方、節本体部のほうについては、モデルとなった否定 short answer 形の影響を受けて、その基本的な形が持つ統語的、機能的な特性が脱落するほど容認可能性が低下することが一般に予測される。節本体部はこれまでの諸例に見られるように省略(動詞句削除)をとともなうことが多く、Lawler (1973) などは削除を義務的としている。(Culicover (1999) は見解を異にしている。) 実際には (31B) のような例も観察されるが、基本的には動詞句削除形になるか、そうでない場合でも文脈から復元できる旧情報を表すものでなくてはならないようである。

(28) a. Not in January, I don't (*go skinny-dipping in Lake Michigan too often). (Lawler 1973:364)

(29) A: I hope I can relax and be myself.

B: Not in my room you can't (*smoke a cigarette).

(30) A: I think I'll smoke a cigarette.

B: Definitely not in my car you won't (smoke a cigarette).

(31) A: I love you, and I wanna marry you. [*Hits a punching bag.*] And if I wanna get married, I can get married, and nobody can tell me I can't. [*Hits the bag again.*]

B: Not with a right like that, they ain't gonna tell you.

(*Family Ties*)

このような特性は、基体である断片的 *Not*-XP では不十分な表示にとどまっている否定の焦点化を最適な形で顕在化しているのが文否定辞に文末焦点を当てることになる動詞句削除形であるというだけでなく、動詞句削除をとともなっている否定の short answer がモデルとして関わった影響が派生体である *Not* 話題化構文の特性の一部として残っていると考えることによって説明することができる。(32) に見られるように、節本体の否定が *not* 以外の表現による可能性はごく限られているが、これについても、この構文が否定断定を強く明示しようとする動機にもとづき基本的な short answer 形がモデル

として関与している事情が反映しているものと思われる。

(32) Not in my car you never/hardly ever/*scarcely/*rarely will. (Culicover 1999: 185)

同様に、(33) のように節本体の否定が主節の否定に限られていることもモデルの影響によると思われる特異性である。Culicover (1999) によれば、否定量化詞 *no* による文否定も可能である [(34a)] が、その生起する位置は限られており、(34b) のように述部動詞句内では許されないようである。これは、モデルである short answer の文否定辞 *not* の位置よりも低い位置に否定量化詞が生起しているためかもしれない。

(33) a. Not in my car I don't think you will.

b. *Not in my car I think you won't.

(ibid.:185)

(34) a. Not Eddie no one found any pictures of.

b. *Not Eddie I found no pictures of.

(ibid.:185)

最後に (35B₁) を見てみよう。この *Not* 話題句の「移動元」の位置は節本体部の関係節内にあり、いわゆる「島の制約」の効果が現れている、すなわちこの構造の形成には移動の操作が関与していると考えられることを示す例に見える。

(35) A: For Dad's birthday, can I give him the tie I bought at the mall?

B₁: *Not at the pawnshop, you can't.

B₂: *Not at the pawnshop. (=you cannot give him the tie you bought at the pawnshop)

しかし、基体である断片的 *Not-XP* の否定辞と *XP* の関係においても (35B₂) のように同様の制約が見られ、(35B₁) の非文法性と矛盾しない。むしろこれを断片的 *Not-XP* における *Not* と *XP* の間の制約の反映として捉えることができる。

5. おわりに

文断片を巡っては Progovac et al. (2006) 等に見られるように、文断片自体をどのように分析・説明するかで枠組みが分かれ、盛んな議論が昨今交わされている。本稿では *Not* 話題化の特異性について、文断片と談話の特性に依拠した分析が有効な説明の道を開く展望があることを論じたが、これは文構造と文断片の一般的な関係の捉え方に有効な視点を提供したことになる。分析の更なる精緻化とより幅の広い経験的証拠にもとづく検証が今後も必要であることは言うまでもない。

参考文献

Chomsky, Noam (1975) *Reflections on Language*, Pantheon Books, New York.

Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language*, Praeger, New York.

Culicover, Peter W. (1999) *Syntactic Nuts: Hard Cases, Syntactic Theory, and Language Acquisition*, Oxford University Press, Oxford.

Huddleston, Rodney, and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.

- Kajita, Masaru (1983) "Grammatical Theory and Language Acquisition," paper presented at the 1st General Meeting of the English Linguistic Society of Japan.
- Kajita, Masaru (1997) "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," Ukaji et al. (eds.), 378-393.
- 梶田優 (2004) 「<周辺><例外>は周辺・例外か」『日本語文法』4.2, 3-22.
- Kono, Tsuguyo (1997) "A Derivative Nominal Construction in English," Ukaji et al. (eds.), 422-430
- Lawler, John M. (1973) "Ample Negatives," *CLS* 10:357-377.
- Progovac, Ljiljana, Kate Paesani, Eugenia Casielles, and Ellen Barton, eds. (2006) *The Syntax of Nonsententials: Multidisciplinary Perspectives*, John Benjamins, Amsterdam.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Ukaji, Masatomo, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shuji Chiba (eds.) (1997) *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, Taishukan, Tokyo

例文出典

TV ドラマシリーズ

- Cheers*, Seasons 1-11, produced and distributed by Paramount Pictures, Hollywood. DVD. 2003-2009.
- Everybody Loves Raymond*, produced and distributed by Home Box Office, Inc. New York. DVD. 2004-2007.
- Family Ties*, Seasons 1-5, produced and distributed by CBS Studios Inc., Paramount Pictures, and Academy of Television Arts and Sciences, Hollywood. DVD. 2007-2009.
- Rawhide*, Seasons 1-3, produced and distributed by Paramount Pictures, Hollywood. DVD. 2006-2008.

映画

- A Shot in the Dark*, the Pink Panther Film Collection, produced and distributed by MGM Home Entertainment LLC., Santa Monica. DVD. 2004.

平成23年10月3日